

旭川文学資料友の会 第37号

友の会通信



発行・NPO法人 旭川文学資料友の会
〒070-0044
旭川市常磐公園 旭川市常磐館内
電話 0166-22-3334
<https://www.abs-tononokai.jp/>
印刷・株式会社あいわプリント

「少年よ大志を抱け…」

旭川文学資料館館長

三原 一仁

古来有名人の名言は数々ありますが、私たち北海道に住む者にとっては、なんといってもクラーク博士の「少年よ大志を抱け！」でしょう。

クラークゆかりの北大（北海道大学）が百五十年を迎えたようです。札幌農学校時代からですが、実は開拓使仮学校として明治五年（一八七二年）に東京芝の増上寺に設置されたのがはじまりで、札幌へ移ったのは明治八年（一八七五年）のこと。百五十年とは札幌に移ってからで、辿ればそれよりも古いわけです。

米国マサチューセッツ州立農科大学の学長だったクラークを札幌農学校に招いたのは、当時の開拓使長官黒田清隆でした。それは米国学留学中にクラークに化学の講義を受けた新島襄（同志社大学の創設者）が強く推薦した

のだといえます。

黒田清隆は毀誉褒貶があるものの、なかなか度量のある人だったようで、箱館戦争後には幕臣だった榎本武揚の助命と復権に尽力したり、政敵ともいうべき大隈重信の入閣に奔走した反面、開拓使官有物払い下げ事件では同郷の政商五代友厚に便宜を図ったりと、われわれの時代の田中角栄を思わせるような人物だったのでしょうか。

話がそれています。クラークが札幌農学校の教頭を引き受けるにあたって、黒田との話し合いの中で、学生たちに道徳を教えるように要望されたのですが、「こと細かな規則は不要だ、ただ『紳士たれ』（Be Gentleman）だけでいい。そのためには『聖書』を学ぶことだ」と強硬に主張して、官立つまり国立の学校では今日に至るまで日本で唯一キリスト教の授業が正規に行われることとなったのです。

それほどにクラークは敬虔なプロテスタントのキリスト教徒でした。彼は札幌には八か月しかいませんでしたが、彼が去った後に入学した二期生の内村鑑三や新渡戸稲造がキリスト教に入信したというのはただごとではあ

りません。

さてまだ話がそれているように思われるかもしれませんが、そうではない。八か月の在任期間を終えて、札幌を去る別れぎわに残した言葉が「少年よ大志を抱け！」です。

近年よく取り上げられるのはこの言葉には続きがあつて、という逸話です。その多くは「……の老いたる者のように」（… like this old man）だと紹介されています。当時の一般的な捉え方からすると確かに高齢といえるクラークが、東洋の新開国である日本に来る挑戦をした自分のことを暗示して学生たちに語ったというのは、確かに否定できない見方ではありましょう。

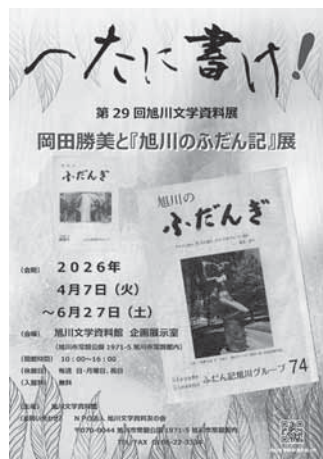
しかし一方で、クラークのこの強烈なキリスト教徒としての側面と、明治期の高名なキリスト者である新島襄や内村鑑三とかかわりなどから考えても、続く言葉は「Boys be ambitious in the name of God!」（少年よ大志を抱け、神の名の下に！）だったはずだという比較文学者小玉晃一氏の説（小玉晃一著「比較文学の周辺」笠間書院一九七三年刊）に私は共鳴するのです。現世の私利私欲の大志ではなく、神の栄光を体現するべく志を持つということでしょう。そしてそのあとに「……の老いたる者のように」と続けたにちがいないと思うのです。

「Boys be ambitious in the name of God, like this old man!」

第二十九回旭川文学資料展

『岡田勝美と『旭川のふだん記』展』

(二〇二六年四月七日～六月二十七日)

岡田勝美と『旭川のふだん記』展
を見て

岡田勝美氏 ぶ長女

今井 亜紅里
あぐり

四月七日～六月二十七日まで長きにわたり展示会をして下さり、最終日には、教え子で編集を手伝って下さっていた谷口三郎さんを迎え記念講演までして下さい、ありがとうございました。

父がふだん記運動を始めたのは、私が大学で上京してからで、私は時々送られて来る「ふだん記」をろくに読みもせず、父と母が夢中でやっていて放任主義でいてくれる事をい

いことに、私は私で平和活動にのめり込み、旭川に帰る事もなく、困った時は父の腰をかじって四十年近く東京・川崎で生活しておりましたので、ほとんどふだん記の事は知りませんでした。

母が亡くなり、兄が亡くなり、父も九十を過ぎていて、一人にしておく事は出来ないという五年前に旭川に帰ってきて同居始めました。

その時には、もう旭川グループの解散を決意し、最後の七十四巻に取り組んでいました。まだ自分で、手すりにつかまって歩いてましたし、ふだん記の最後の仕事に関しては全部一人でやっていて、私は特に手伝う事もなく、こういう事を四十年もやってきたんだなあと父母の第二の人生に、まだ父が生きているうちに触れる事が間に合って良かったと思いつつながらこの五年間を共に過ごしてきました。

七十四巻を出した後も、入退院を繰り返しながら自分史を次々とまとめあげ、最後の五巻目を出すころ、文学資料館で展示会をして下さる事を聞き、今までやってきた事を、大きく評価下さり、集大成となり本当によかったね、と思いました。ふだん記だけでなく、「岡田勝美」と文学者のように取り上げ、昔の同人誌「風土」まで展示下さったおかげで、まだまだやりたい事が一杯で、昔書いた小説や、漢詩の論文までまとめようと、意気盛んです。(えっ、まだやるの?…)

谷口さんのお話で、私は特に、割付の苦勞

と赤字の話を聞けて良かったです。一人一人の文章をそのまま順番に載せていくのではなく、コピーした時に自分の文章がまとまっているように工夫して割付をしていた事、言われて初めて気付きました。確かに、そういう割付をしているのは、他の地域のふだん記と見比べても旭川だけのようです。

その事を父に聞いてみたら、「だって、自分の名前が下の段にあるのは嫌だろう?」と言うのです。(いや、別に私は気にしないけどな…)これは、やはり同人誌とか出していた父の本作りへのこだわりなんだろうなと思いました。ちょっと気取っているようでもあり、よく言えば、一人一人の文章に対する敬意の現れとも思えます。

いつも文友さんの事を、あの人は本当に立派な人なんだ、あの人は本当に苦勞して生きて来られたんだ、という話をよく聞きます。

谷口さんが「エリート中のエリート」と言われましたが、戦争中も頭の中は西洋かぶれでどこか他人事のように生きていた父が、母の遺族の悲しみに触れ、人間として導かれたと書いてるように、ふだん記の文友さんの文章の編集に携わる事で、エリート意識からの脱却、人間としての成長を深めてきた四十年だったのだらうと思います。割付のこだわりには、そういう一人一人への敬意が込められているに違いはない…と思いました。

又、赤字に関しては、最後の発送は、入院中だったので私がしましたが、沢山の図書館



記念講演会で講演する
谷口三郎氏
2026年6月27日



資料展を観覧された岡田勝美氏と
今井亜紅里さま
2026年5月27日

に送っていて、確かに、この分は全部赤字になるわけだと納得。こんなに送られてもどつかに積み上げられているんじゃないかなと思っていました。講演に来られていた教えずだという方が、図書館で見つけて読んだとか、そういう方が今までにも何人かいらっしゃり、びつくり。文学資料館で展示会を持っていたら、赤字も決して無駄じゃなかったんだな、と思います感謝でした。

ミニ企画展「旭川の俊英歌人」

(二〇二六年六月二日～八月二十九日)

ミニ企画展「旭川の俊英歌人」のこと

旭川歌人クラブ 会長

桑原 憂太郎

旭川文学資料館では、今年の八月末までミニ企画展「旭川の俊英歌人」が開かれた。旭川にゆかりのある四人の歌人についての展示であった。

その四人のなかに、私、桑原憂太郎も含まれていたもので、ちょっと言いにくいんだけど、一緒に展示された。柳澤美晴、塚田千束、井口可奈の三人の歌人は、まさに俊英と呼ぶにふさわしい、全国的にも注目されている歌人であるのは間違いない。

柳澤美晴さんは、今年十五年ぶりに第二歌集を刊行した。たいへん好評だ。

・春光町国有無番地戦争ゆかぬ(前提の)戦車吐き出す

「並行世界にも朝」

歌集には、この短歌作品のような、旭川を題材にしながら現代社会の諸事象へと発想を広げていく切れ味鋭い作品が並んでいる。いいなと思った人は、歌集を手にとってほしい。市内の書店にいれば普通に売っている。

塚田千束さんは、去年、第二歌集を刊行。こちらにもたいへん好評。塚田さんの短歌作品

は、こんな感じ。

・思い出して あなたがかつて火だったこと
美しき骨の駅だったこと

「星夜航路」

骨の駅って素敵な表現だ。塚田さんは、優しい言葉で不穏な雰囲気を出す描写が得意だ。

三人目は、井口可奈さん。この人の短歌はこんな感じ。

・ひらいているならそこがドア。夢見がちなんだねって中からわたしが

「わるく思わないで」

井口さんは、買物公園のそばにある「喫茶シンカイ」さんで歌会を定期的に開いている。興味のある人は、シンカイさんを訪ねてみたいだろう。

そういうわけで、今回展示された三人の歌人は、短歌の世界のトップランナーといってよく、今回の企画展をみたら、現代短歌というのは、いま、こんな感じになっているのだな、というのがよくわかるものになっていた。

今回、文学資料館でこうした短歌の企画展を開いていただいたことに、旭川で短歌の活動に携わっているものとしては、とても嬉しく思っている。世の中は「短歌ブーム」ということで、新しい趣味として短歌をやってみようという人も増えてきている模様。今回の企画展で、短歌に興味を持ってくれた人がいたのなら、それは望外の喜びだ。

旭川ゆかりの三人の俊英歌人の今後の活躍に、どうぞご期待ください。そして、また旭川文学資料館で、短歌にかかわる企画が開催されることを願っている。

企画展

「神居古潭と文学」

(二〇二六年七月二十一日～

十一月二十八日)



神居古潭と文学作品について

旭川文学資料友の会 理事

黒田 忠

神居古潭では、二〇〇七年に「神居古潭溪谷の変成岩」が「日本の地質百選」に選定されています。約一億年前、ユーラシア大陸の東縁や古太平洋の海洋底にあった岩石(海洋プレート)が大陸とぶつかり、その海洋プレートが沈み込み高圧低温型で変成作用を受け、四〇〇km以上も移動してきたもので、神居大橋の上から見ることでできる石灰岩の

褶曲した露頭が一億数千万年前のサンゴ礁で造られた岩石が地底深く沈み込み現在の私たちの目の前に現れているそうです。プレートテクトニクスを実感できる学問的に重要な場所であることが判ります。この地域は、地球の歴史を物語る地質遺産(変成岩や甌穴群)、北海道の開拓史を象徴する近現代の歴史的遺産(旧駅舎やトンネル群)、古代の人々の営みを伝える考古学的遺産(竪穴住居跡・ストーンサークル)が複合的に存在する重要な場所です。石狩川の浸食による甌穴とアイヌ伝承の「魔神の足跡」もまじかに観察できます。

神居古潭には三つの文学碑があります。国道十二号線から入り神居大橋(吊り橋)の手前に平岩弓枝の「旅路」碑、神居大橋を渡り旧駅舎に向かう途中に九条武子の歌碑があります。旧駅舎の神居岩がわの大きな自然石に黒御影石に刻まれた小林孝虎の歌碑があります。前二か所の碑については解説版があり文学碑設置の由来が分かりますが、小林孝虎の歌碑は解説文もなく、碑文も見えづらくなっていますので、旧神居古潭駅舎の近くにある小林孝虎の歌碑について紹介します。神居古潭にまつわるアイヌ伝承にちなみ歌った短歌七首です。歌碑の歌は小林孝虎の短歌集『アンモナイト』に収録されている神居古潭幻想賦です。

神居古潭幻想賦

小林 孝虎

サマイクル(アイヌの守護神)と、ニチネカムイ(鬼神)との決闘。そして、それらを優美に支える王城址とチャシ跡。また、コロポックル(路の下の神様)が誘ふ夢の伝説。これらはすべて、この地神居古潭に、静かに今も眠りつづけてゐる。すなはち、これの幻想に迫り、この七首を刻む。

サマイクルに首級討たれし鬼神の身は
立ちながら巖になりつ

刎ねられし鬼神の首と恐れ言ふ
向岸の岩もすでに苔むす

ニチネカムイの足跡ふかき凹穴
かたたざまにして昏きをのぞく

蝶 鮫の不意にもよぎるまぼろしを
消しがたくゐて鶴鴿あそぶ

蛇も蜥蜴もここに棲みつぎて
王城の址の夏草あをし

チャシ跡の昼しづかなる木の下に
暝れば聴こゆ矢叫びのこゑ

コロポックルの裔ほろびたるかなしみか
叢 低く風はそよげり

『神居古潭幻想賦』の初稿は一九七六(昭和五十一)年九月発行の「北方短歌」九月号でその時は十二首が掲載されています。以下の十二首です。

サマイクルに首級絶たれし鬼神の胴体はあはれ
巖になりて立つ
注…鬼の胴体

対岸に刎とばされし鬼神の頭の石もすでに苔むす
注…鬼神の首

蛇も蜥蜴もここに棲むといふ王城の址の夏草緑し
注…サマイクル王城址

ご朱印を過ちて濡す重蔵の嘆きはいまも瀬のいろを変ふ
注…御朱印濡らし

チャシ跡の夏叢にまぎれゆく紋白蝶の行方は追はず
注…アイヌ・チャシ跡

伝説を永く秘めつつ赫々と義経岩の巖頭は照る
注…義経岩(神居岩)

慈悲の相ただありがたく見上ぐれば夢殿観音のおん眉は澄む
注…夢殿観音像

さみどりの風をまとひて在します菩薩の面の伏目がちなる
注…夢殿観音像

鰈鮫の不意にも過ぎるまぼろしを消しがたく

ゐて潭をのぞけり
注…釣橋直下
急湍のここに挑みし跡ふかくいまだも昏し
穴の群
注…河岸凹穴群

形よき石を並べてひそかなる先住の民の葬り処
ここは
注…ストーンサークル

現世に裔をもたざるかなしみか震へつつまた草群さわぐ
注…先住民族穴居跡

短歌の最後にそれぞれ短歌の題材となった場所の但し書きがあり、それらの場所については現在でも神居古潭の名所景勝地であり、アイヌの伝説が残っている場所です。

初稿の短歌は碑に刻まれた七首と完全に一致する短歌はありません。「北方短歌」に掲載されたのは一九七六(昭和五十一)年九月、

神居古潭幻想賦の歌碑の除幕式が一九七八(昭和五十三)年五月七日、歌集『アンモナイト』が一九八六(昭和六十一)年九月ですの

で、初稿の短歌が作成されてから石碑の短歌が作成されたということが出来ます。初稿の短歌十二首についてはそれぞれの場所に臨み

素直に写生的に詠まれていて好感が持てますが、碑に刻まれた歌はいずれも推敲を重ねて

研ぎ澄まされた言葉を重ね詠まれています。歌碑は七首ですが、その背景には十二首の試

行錯誤がありました。削られた歌にも作者の思いは込められています。しかし、その推敲

の過程をたどることで、小林孝虎が最後に私たちへ伝えたかった神居古潭の姿が見えてきます。それは、景勝地としての神居古潭ではなく、アイヌの神話と歴史、人々の記憶が今も静かに息づく「文学のふるさと」としての神居古潭だったのではないのでしょうか。

小林孝虎は神居古潭小中学校校長として赴任し、神居古潭郷土保勝会を創設し、地域文化の保全と振興に尽力された方なので、地域の自然と文化に精通されていたことがわかります。文学碑に名を刻んだ人の平岩弓枝『旅路』、九条武子『短歌集 薫染』、のほか神居古潭が登場する文学作品や歌(短歌・俳句等)が多数あります。遅塚麗水(ちづかれいすい)の小説『蝦夷大王』、中山義秀の小説『迷路』、岩野泡鳴『断桥』、徳富蘆花『みみずのたわごと』熊の足跡』、河東碧梧桐(かわひがしへきごとう)『紀行文集三千里』、石川啄木『雪中行』、与謝野晶子・鉄幹『冬柏』掲載短歌、西本一都『第七句集 信濃抄』掲載俳句、三浦綾子『果て遠き丘』『草のうた』等があります。最近では漫画家野田サトル『ゴールデンカムイ』第十巻で神居古潭が登場します。

このように過去から現在に至るまで様々な文学作品に登場する神居古潭の様子と神居古潭を取り巻く自然について紹介する企画展を開催し、より多くの人に神居古潭の魅力について再認識していただけるような展示になっていますので、是非ご観覧ください。

新理事より

旭川文学資料友の会
理事に就任して

橋 爪 裕 子

旭川文学資料館には、旭川ゆかりの文学者のことを調べたり、手に入らない作品が掲載された雑誌について調べていただいたりと、長年にわたり大変お世話になってきました。このように何か疑問や困ったことがあると、学芸員の香澤さんに相談し何度も助けていただきました。また小熊秀雄賞に深い関心をもっており、新しく受賞された詩人がどのような方なのか、またその受賞詩集について、文学資料館で資料を見て読むのを楽しみにしてきました。私自身は、「零座」という同人誌に参加しており、これまで発行された零座は文学資料館に保管していただいております。

旭川にゆかりのある文学者は、非常に多いのです。このことは昨年二〇二五年に二十五周年記念誌として発行された「旭川ゆかりの文学」や「文縁」を見るとわかります。また今年、旭川文学資料友の会で制作した「旭川

文学碑マップ」では旭川市内に、文学碑が四十九基あり、そのうち常磐公園内だけでも六基あることがわかります。こんなにも、旭川は文学活動が盛んであることを改めて認識しました。

そしてこの流れは現在に引き継がれており、若い詩人、歌人や俳人、さらには文芸批評家などが生まれています。その作品に旭川という土地柄や旭川に住む人々との交流が与えた影響は大変大きいと思います。

私ごとになりますが、昨年ある大学の通信教育課程芸術学科芸術学コースの三年生に編入しました。芸術学、日本のみならず西洋やアジアの芸術史、日本文化の源流、音楽文化論、詩歌と日本文化、芸術資料を読むための漢文や崩し文字の読み方、そして哲学、文学研究などの講義があります。芸術学とは、絵画や彫刻のみならず音楽や文学などあらゆる芸術と創作活動の歴史や理論、そして社会的意義などについて客観的に研究する学問のことです(すみません、一部AIの文章です)。私は絵画や仏像が好きで入学したのですが、感覚的に好きということではなく、それをいろいろな論文や過去の資料を読み解釈して客観的に表現することが求められています。文学や哲学の講義も聴いて、その奥深く深淵な世界を少しでも覗けた感じがしています。この学の中で実感したことは、私がいかに無知であつたかということです。本当に何も知りませんでした。今、学んで知ることの

楽しさを感じています。

そして多くの素晴らしい作品に接することが出来る旭川文学資料館に感謝しています。

このたび理事に就任するにあたり、この旭川の宝とも言えるべき文学資料館が、もっともつと市民の皆様にご利用していただけますよう、いろいろな企画を考えて提案できたらと思っています。

場所が生みだす「物語」

那 須 敦 志

ふるさと旭川の郷土史について、その魅力を発信する活動が続けてもう十年あまりになります。そうした活動をしていると、街の一つひとつの場所には、過去の人々の営みや記憶が、まるで地層のように幾重にも積み重なり、いまに至っていることに気づきます。なかでも、旭川駅や平和通、旭橋、常磐公園といった場所は、より多くの人の記憶や出来事が蓄積され、街の歴史を象徴する特別な場所になっています。

哲学者の中村雄二郎は、そのような場所を「トポス」と呼びました。トポスとは古代ギリシャ語で「場所」を意味します。中村はそこに人々の記憶や共同体の歴史が凝縮された特

別な意味を持たせました。そしてこのトポス、文学の世界では作品を生み出す源泉にもなるとされています。例えば三浦綾子にとつての旭川は、生まれ故郷というだけではなく、人生観や信仰を育み、数々の作品の舞台となった、まさに創作世界の中心となるトポスです。

興味深いのは、トポスを特徴付けるのは過去の記憶の集積だけではないことです。その土地から新たな文学や芸術が生み出されれば、それ自体がまた新しい記憶となつて場所に積み重なり、トポスはいつそう豊かな意味を帯びます。場所が作品を生み、作品が場所に新たな物語を刻む——そのような循環が、街の文化を育みます。

そうしたことを考えていた私にとって、今年六月にあつた新しい演劇専用の小劇場「旭川銀座小劇場シアターロビン」のオープンは、とても印象深い出来事でした。劇場が入居する銀座センタービルⅡ銀ビルの場所(三条通十五丁目)は、明治末に芝居小屋が建ち、大正には回り舞台まで備えた本格劇場「錦座」が開設されたところです。そこでは小熊秀雄も参加した旭川初の住民劇や、芥川龍之介の講演会なども開かれました。旭川文化史の言わば「聖地」と言つて良いでしょう。

ただ今回劇場づくりに携わつた地元の演劇人がそのことを知つたのは、作業が本格化した後でした。もちろん偶然と言つてしまえばそれまでです。しかし私には、この場所が長

い年月をかけて蓄えてきた営みの記憶が、意欲ある新しい文化の担い手を招き寄せたように感じるのです。やはりトポスには、新たな物語Ⅱ活動を生み出す不思議な力が宿っている、そう強く思います。

旭川文学資料館もまた、常磐公園という旭川を代表するトポスにあります。そこには地域の文学遺産が受け継がれ、新たな交流や発見が生まれています。歴史が積み重なつた場所には、人を惹きつけ、物語を育み、未来へつないでいく力がある。そう信じて、これからもふるさとの「場所」と、そこに生まれたさまざまな「物語」を伝える活動を続けていきたいと思っています。



新劇場の入る銀ビルとこけら落し公演のパフレット



劇場錦座と現銀座通(昭和4年・絵葉書)

資料館だより

・令和八年度 旭川文学資料友の会 通常総会が、五月三十一日(日)午後一時半から、旭川市常磐館二階講堂で行われました。令和七年度事業報告、決算報告、監査報告、令和八年度事業計画案、予算案すべて異議なく承認されました。また、今年は役員選任の年でしたので、理事二名の新任を含めた役員体制案も異議なく承認されました。

・旭川文学資料館、井上靖記念館の今年度の企画展、イベントについては各HPをご覧ください。

受贈資料(敬称略)

(二〇二六・二〇二七・七)

- 岡田 勝美 岡田勝美・河合慶子『思慕』『細豪志記』
- 南 聡 『土別市史抄 私たちの歩み』『札幌のふだんぎ』五十九号
- 斉藤 道子 小篠真琴詩集『朝焼けのまをゆく』
- 小篠 真琴 富岡悦子詩集『海辺の翼』他
- 富岡 悦子 文芸誌「零座」第十四号
- 橋爪 裕子 本田初美歌集『葉っぱのぎざぎざ』
- 本田 初美 詩誌「草々辺」準備号〜六十号
- 生駒 孝子 詩誌「草々辺」準備号〜六十号
- 矢野 俊彦 「国鉄詩人」各号(計四十五冊)
- 東京旭川会 会報「ななかまど」四十六号

- 柳澤 美晴 柳澤美晴第二歌集『並行世界にも朝』他
 - 桑原憂太郎 桑原憂太郎評論集『短歌のブルーノ』他
 - ときわ短歌会 「ときわ短歌」令和八年四月号、六月号
 - かぎろひ詩社 歌誌「かぎろひ」通巻五百号記念号
 - 塚田 千束 『ポエトリリーレー』『ランデヴー』他
 - 井口 可奈 井口可奈歌集『わるく思わないうで』、井口可奈編著『芸人短歌』『芸人短歌2』
 - 佐相 憲一 「小熊秀雄協会会報」四十、四十一号、詩誌「指名手配」十三号他
 - 植西富士子 「新郷土たかす」第六十四号
 - 織田 典子 北海道廳管内全圖(明治二十八年六月発行)他
 - 東 延江 柴田三吉詩集『ひとつの夜とひとつの朝』、俳誌「雪華」他
 - 森下 辰衛 伝記漫画『三浦綾子』他
 - 黒田 忠 大塚一美『生きているユーカラ』他
 - 村田 和子 『岩田道夫の世界 ミクロコスモス』
 - ナナカマド同人会 「ナナカマド」第五十六号(最終号)
 - 澤田 展人 「逍遙通信」第十一号
- その他、各地文学館、記念館館報、各地文芸誌、歌誌、俳誌、詩誌等たくさんさんの御寄贈を賜りました。心よりお礼申し上げます。

友の会人事動向(敬称略)

【新入会員】

佐藤 蓉子、南 聡、川嶋 均

【現在会員数】(七月末現在)

一七二名(うち法人 七件)

編集後記

七月二十一日から企画展「神居古潭と文学」が始まりました。岩野泡鳴、与謝野晶子、九条武子ら文人が立ち寄り作品に表した景勝地「神居古潭」、NHK連続ドラマ「旅路」(平岩弓枝作)の舞台にもなりました。アイヌ民族伝説の舞台で旭川八景の一つ、日本の地質百選に選ばれ、観光地として親しまれている神居古潭を、本展では文学と自然・歴史の観点からその魅力を紹介しております。

さて、当館は常磐公園の中にあり、公園では春から秋にかけて様々な花が訪れる人々を癒してくれています。今は六月頃から千鳥ヶ池で咲き始めた睡蓮が見頃です。ご来館の折りにはその可憐な姿もご覧になって頂ければと思います。(ま)



当会設立に尽力された哲学者の岡田雅勝さんが去る七月二十四日逝去されました。心よりご冥福をお祈りいたします。